



神聖かまってちゃんと明日、ママがいない

フィクションと現実をめぐって

《『NHKによろこそ』／堤幸彦が監督した『BECK』／現実と同じもので満足しているなら、そんなもの作って楽しむ必要なんかないわけですよ／人間の感情なりリアリティはフィクションの鏡を通さないと絶対に伝わらない／『ソウ (SAW) 』について 》

神聖かまってちゃんと明日、ママがいない
——フィクションと現実をめぐって

「フィクションということが日本人の中では感覚的に定着してないんですよ。 (略)
現実と較べるのは仕方ないとしても、その較べ方が現実と違うからおかしいというのは。(略) 現実と同じもので満足しているなら、そんなもの作って楽しむ必要なんかないわけですよ」 福田陽一郎

語って欲しいバンドを語ってくれない音楽雑誌やライターに我々、は反旗をひるがえそう！
これは、神聖かまってちゃん評である。そ、ニートの。。。
音楽の文脈を知っている音楽ライターが書かないから、
20代のks底辺が違った角度から「神聖かまってちゃん」評を紹介します。
今回は、「フィクション」を軸に、神聖かまってちゃんについて語っていきます。

人類の歴史は表現をめぐる闘争の歴史である。

いまだに宗教戦争が続いているのだから。

テレビドラマ『明日、ママがいない』がクレームによってついに内容が変更されることになった。

内容は、児童養護施設の子どもたちがいろんな人と触れ合って「幸せ」とは何かを考える物語だ。施設の大人が怒鳴ったり食事を与えなかったり、その他さまざま演出にクレームが入ったという。

赤ちゃんポスト「こうのとりのゆりかご」を設置する熊本市の慈恵病院が「養護施設の子供や職員への誤解偏見を与え、人権侵害だ」と、日本テレビに抗議。全国児童養護施設協議会と全国里親会も会見を開き「自殺するものが出たらどうするんだ」と訴えたこの事件。

うーむ問題は根深い。というのも、どちらの気持ちも分かるのだ。

例えば、堤幸彦が監督した『BECK』↓

例えば、堤幸彦が監督した『BECK』(二〇一〇年)という映画がある。

ハロルド作石によるマンガが原作だ。バンドを組んで成功を目指すという青春ストーリーである。

この作品、映画がひどかった。バンドたちがロックフェス会場で食事をするシーンがあるのだが、↓

この作品、映画がひどかった。

バンドたちがロックフェス会場で食事をするシーンがあるのだが、そこがおかしい。本来ロックフェスは会場の裏にミュージシャンやスタッフしか入れない場所がある。そこが楽屋になっており、客が入ってこないよう警備員が出入口に立っている。

しかし、映画ではなぜかバンドたちが食事する楽屋に女性ファンが侵入、あろうことか警備員は彼女たちを楽屋から追い出さず、ロープを張って彼女たちがそこに静止できるように配慮する。

そこ、楽屋の中だよね？そこにロープ張ってどうするの？というツッコミをよそに主演の佐藤健はその状況を見向きもせず敵対する人間と会話していた。

そのときロックリスナーは思った。↓

そのときロックリスナーは思った。

堤幸彦はロックフェスだけでなく、ライブハウスにもきつと行ったことがないぞ・・・・。

恐ろしい。↓

恐ろしい。音楽映画をやるのにそこを踏まえてないっていうのはどういうことだ！ロックを表層だけなぞりやがって！愛がまったくないぞ。

こんな映画は駆逐だ。

しかし、それとは反対に、興行的には大ヒット。初日二日間で興収三億円、動員は二三万人になり映画観客動員ランキング（興行通信社調べ）で初登場第一位となった。ロックリスナーのなかではロックをまったく分かっていないバンド映画として日本映画界に君臨することになる。

ロックの表層だけなぞって「はい、ロックバンド映画の決定版出来上がりました」なんてのは、われわれにたいする侮辱だ。なめるなよ、と抗議のひとつも入れたくらいだった。

だから、注目の作品にたいして「こんなものやめろ」といいたい気持ちが分かるのだ。



とはいえ、われわれは心が広いのでそんなことはしない。↓

作品にたいして「こんなものやめろ」といいたい気持ちが分かるのだ。とはいえ、われわれロックリスナーは心が広いのでそんなことはしない。権威はいつもわれわれマイノリティをかばうフリして表層だけとりつくろうだけで、すくわないことを知っているからだ。

一方、傷つく人間がいるからといわれて表現を規制されると頭にくる。傷付いたから規制を申し込むっていうのは、傷ついたことを柵にあげて傷付け返してるじゃないかと思うのだ。

うーむ、むつかしい。↓

当時大ヒットしたという生放送シチュエーションドラマの先駆け『男嫌い』を作ったディレクター福田陽一郎は阿久悠との対談で興味深いことをいっている。

「フィクションということが日本人の中では感覚的に定着してないんですよ。(略) 現実と較べるのは仕方ないとしても、その較べ方が現実と違うからおかしいというのは。(略) 現実と同じもので満足しているなら、そんなもの作って楽しむ必要なんかないわけですよ」

どうやら六〇年代や七〇年代からテレビドラマにはフィクションをフィクションと思えない人からの抗議があったようだ。二一世紀になってもまだ同じような問題に直面しているとはこの時代の制作人は思っていないだろう。

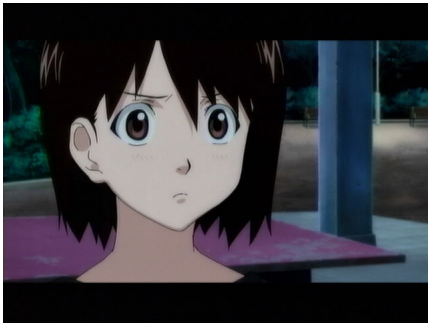
さらに福田陽一郎はフィクションの重要性をこう説明した。

人間の感情なりリアリティはフィクションの鏡を通さないと絶対に伝わらない。例えば戦争の現実の中ではリアリティもへったくれもないから死ぬだけだ。でも本当にいいフィクションで戦争をテーマにしたものなら、その中ではじめて人間の素晴らしさというのが出て来る。このフィクションの鏡が日本ではなかなかわからない。フィクションを通すと全部ウソになってしまう、という。

なるほど。例えば『NHKによろこそ』では↓

なるほど。例えば『NHKによろこそ』ではニートの佐藤くんになぜか美少女の岬ちゃんがなついてしまう。

そんなアニメみたいなことは実際のニートにあるわけないという批判をすることは可能だが、われわれひ弱な人間たちはそのフィクションの鏡によってときには悶絶し、ときには号泣する。それは岬ちゃんというフィクションの存在がいたから、ニートの佐藤くんのドラマが視聴者の感情に訴えたのだ。



フィクションの鏡というものが少し分かってきたぞ。↓

フィクションの鏡というものが少し分かってきたぞ。

日常というのは本来、日常ではないのだ。自分にとっての日常は他人にとっての日常ではないからだ。もっと言うと、日本人の日常はアメリカ人からすると日常ではない。そう考えるとわれわれが日常と思っているのは実はすべてが非日常によって構成されたものであることが分かる。しかし、人は過ごしていく日々のなかで自分の日常を思い返してみても非日常に分解して考えることができない。

それは、自分の感じるべき感情がマヒするということである。

例えば、〇〇年代にヒットした『ソウ (SAW)』というサスペンス映画がある。わたしは最初こそ劇中のグロテスクな映像にドキドキしたものだが、シリーズを重ねるごとにそれに慣れていき、もっと衝撃的なグロテスクな映像でないかなあ、という欲求にかられた。

日常に消えて見えなくなってしまった自分の感情を想起させることが表現の役割だろう。

音楽も演劇も映画もドラマも関係ない。↓

日常に消えて見えなくなってしまった自分の感情を想起させることが表現の役割だろう。音楽も演劇も映画もドラマも関係ない。すべて同じ宿命を背負っている。

それは、ときとしてウザがられるし、嫌がらせにもなる。

それでもやるのが表現者だろう。

ロックンロールもそうだ。↓

ロックンロールもそうだ。フィクションによって日常の忘れていた感情を想起させる。人によっては嫌がらせに感じるかもしれない。でもそれによって人は現実とロマンを常に相対的に見られるようになる。

神聖かまってちゃんはロックンロールを鳴らす。↓

ロックンロールもそうだ。フィクションによって日常の忘れていた感情を想起させる。人によっては嫌がらせに感じるかもしれない。でもそれによって人は現実とロマンを常に相対的に見られるようになる。



神聖かまってちゃんはロックンロールを鳴らす。↓

フィクションの作品をみることによって、自分の忘れていた感情が浮き出ることがある。そうさせるのが優れた作品だ。

社会への嫌がらせみたいな表現こそ必要な表現だろう、とわたしは思う。その表現によって救われる人間はいるからだ。それによってしか救われない人間がいるからだ。←

うおお

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/89169>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/89169>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ